ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か

——パリ・ギリシア語写本八五七番とビザンツの修道院文化——

橋川裕之

はじめに

本稿の目的は、現在、パリ国立文書館に所蔵されている一写本の作者（写字生）を明らかにすることである。パリ・ギリシア語写本八五七番（Codex Parisinus Graecus 857：以下、パリ写本と省略）を分類上の名称とするこの写本は、フランスにおいてではなく、一三世紀ビザンツのとある修道院で作成されたものであり、一一世紀の修道士パウロス・エウエルゲティノスの著作『シュナゴゲ』の第四部を内容とする。

この写本は内容や伝来の経緯というよりむしろ作者の問題によって、一部研究者の、それも歴史学者というよりは文献学者や古文書学者の関心を集めてきた。歴史学者がこの写本に注目してこなかったのは無理もない。この写本は一三世紀に成立したことが写本中の記述から確実であるにもかかわらず、同時代の事件の記述を含む歴史書や書簡や証書の類ではないし、その作者が同時代の著名な貴族や知識人でないことも明白であった。つまり彼らにとって、それはビザンツにおいて何千何万と生産されたギリシア語写本の一冊、『シュナゴゲ』の写本の不完全な一冊に過ぎなかったのである。[1] 一方で、古典文献の伝来経緯や特定の写本の成立状況に関心を寄せる文献学者や古文書学者は、この写本の奥付（コロフォン）に写字生によって書き込まれたテクストに注目した。写字生はそこで、自らがアタナシオスという名の修道士であることと、写本がガレシオンの修道院において一二六一年に作成されたことを明らかにしていた（ガレシオンの修道院については後述）。

奥付に現れるアタナシオスとガレシオンという二つの固有名詞

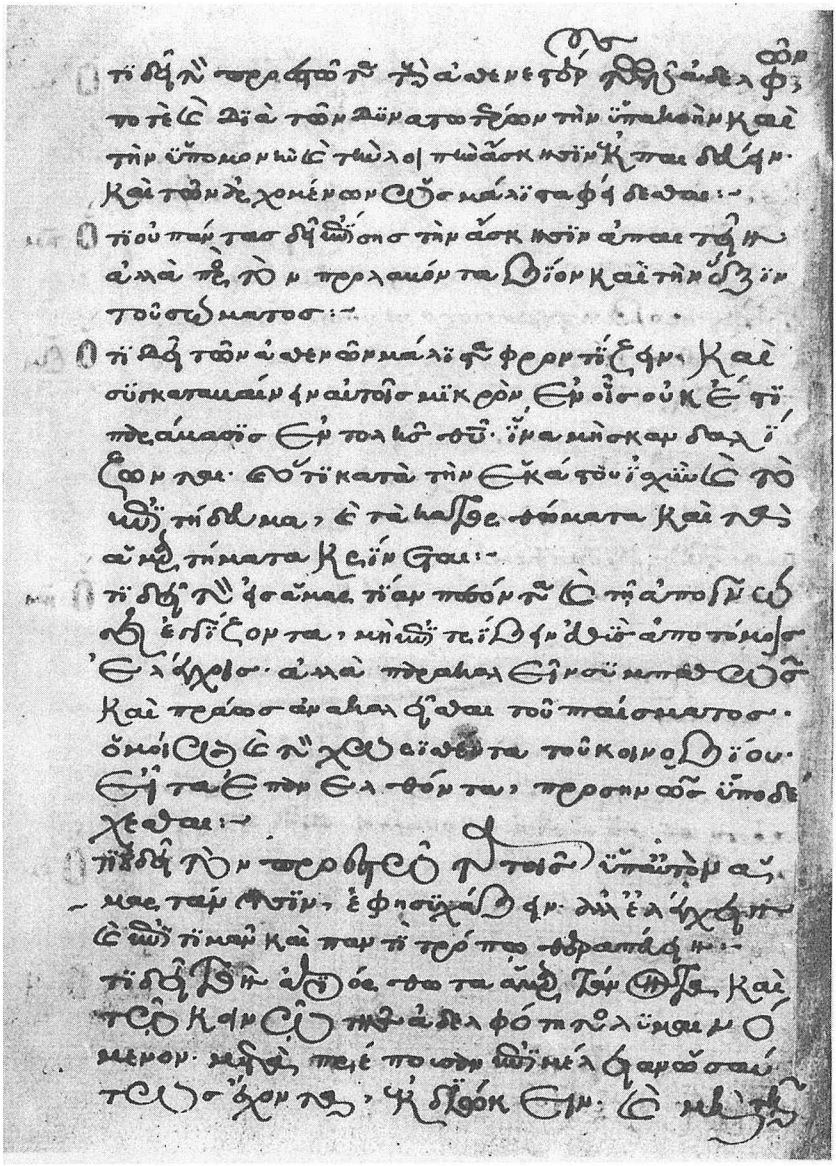

図１　パリ・ギリシア語写本857番57フォリオ裏（E. Gamillscheg and D. Harlfinger, *Repertorium der griechischen Kopisten, 800-1600*, v. 2, C, table 5から転載）

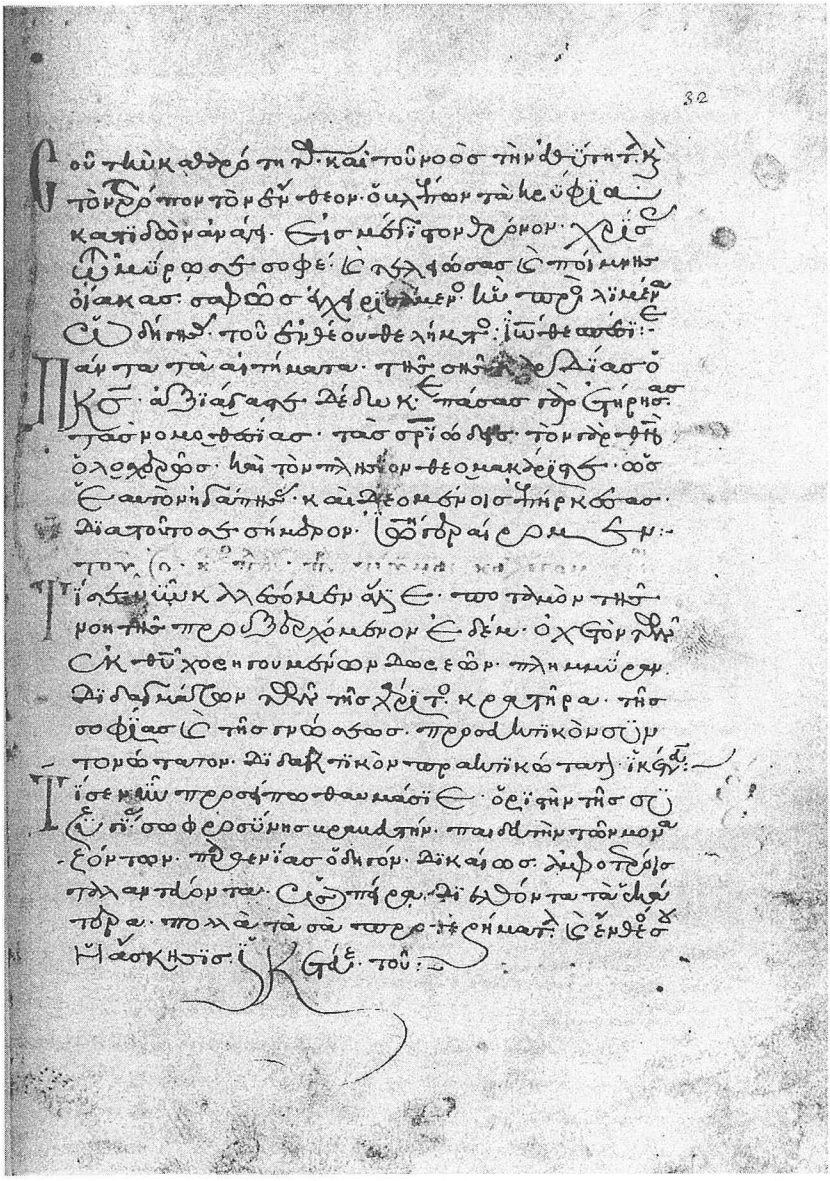

図2　ヴァティカン・レギネンシス・ギリシア語写本63番32フォリオ裏（A. Turyn, *Codices vaticani graeci*, table 20から転載）

は、一部の学者に、一三世紀ビザンツの一人の著名な修道士を想起させた。その修道士とは、一三世紀から一四世紀にかけて二度にわたってビザンツ教会の長を務め、今日の正教会において聖人として記念されている、コンスタンティノープル総主教アタナシオス一世（在位一二八九-九三年、一三〇三-九年）である。[2] この総主教のアタナシオスは一二三〇年頃に生まれ、遅くとも一三二〇年代前半までに死去したと一般に考えられているため、パリ写本の一二六一年の作成時期は総主教アタナシオスの生きた年代と重複する。加えて、彼は総主教に選出される以前にガレシオンの修道院に長期間暮らしたと、一四世紀の二人の伝記作者、ストゥディオスのテオクティストスとヨセフ・カロテトスによって報告されている。つまり、こうした証拠から、ガレシオンの修道士アタナシオスとコンスタンティノープル総主教アタナシオスは同一の人物であり、パリ写本は総主教アタナシオスの直筆写本である可能性を、彼らは示唆ないし積極的に主張したのである。

パリ写本の作者、ガレシオンの修道士アタナシオスとは何者か、彼は本当にコンスタンティノープル総主教アタナシオスその人であるのだろうか。

この問いは、一写本の作者を特定するということ以外では、次の二つの点で重要である。

一つは、それが、聖人伝やその他の史料からは窺い知ることのできない、総主教アタナシオスの生涯の一側面を明らかにする可能性を秘めていること、換言するなら、単に古文書学の範疇に留まることなく伝記的研究としても成立しうることである。アタナシオスの生涯は比較的豊富な証拠群によって再構成することができるが、アタナシオスによる写本作成について言及する記述ないし証拠は、それら主要史料の中には一切見当たらない。[3] もしアタナシオス本人による写本作成を現存する写本かその他の証拠によって確認することができるなら、いわば必然的に、アタナシオスがいつ、どこで、いかなる状況下で写本を作成したのかというコンテクストの問題が提起されるだろう。この問題に対する解答は無論、伝記研究的なそれとなるわけである。

もう一つの重要な点は、それが、アタナシオスという一個人の事例を通じてではあるが、ビザンツにおける識字および写本作成の実態――それも高度な教養を備え、日常生活において写本を積極的に作成、売買、貸借、参照していたことが明らかな知識人層ではなく、山岳の修道院で暮らすことを好み、都市部に集う知識人層からは異質な存在として見られた修道士たちの――に迫る手がかりとなりうることである。[4] 歴史学者は一般に、文献学者が校訂し活字化したテクストのみを分析の対象としがちであるが、言

うまでもなく、ある特定のテクストが成立し、保存ないし破棄される経緯と過程、つまりコンテクストには、作者や読者の意図を含め、時代や地域固有の特徴が刻印されている。伝記的な情報もこれに関連するが、テクストはその書かれた文字によってのみならず、そのコンテクストを通じても、解読されるべき歴史的痕跡を提示するのである。アタナシオスという一修道士に関連するわずかばかりの写本から、ビザンツの写本生産ないしその利用の全体像を描き出すことはもちろん不可能である。[5] それでもやはり、ビザンツの修道士の写本との関わりという点で見れば、それが有益な手がかりを供することに変わりはない。なぜなら、この写本を歴史的に読み解く作業、写本のテクスト・コンテクストを通じて彼らの日常生活や同時代の文化や政治との関わりを明らかにする作業は、これまでほとんど試みられてこなかったからである。[6]

ところで、パリ写本に付きまとう一つの困難な問題は、そもそも総主教アタナシオスがそれを作成したことを事実として示す明確な証拠が欠如している一方で、彼との関係を可能性としてほのめかす痕跡がその中にあることである。一般的に、写本の作者を特定するための有力な手がかりとなるのは写本内外の情報、すなわち写本中に記された写字生の名前と、彼ないし彼女を指し示す別写本、別史料中の記述である。つまり、特定の写字生が当該写本の内外いずれかの言及によって明らかとなれば、単に古の書物を書写しただけの無記名の写本であっても、筆跡の比較によって作者の異同を判断することができる。パリ写本に関してみれば、この一般的な手がかりを見出すことが不可能なのである。

パリ写本には先述のとおり作者のみならず作成地、作成年の記載もあり、なるほど総主教アタナシオス自身がそれを作成したと解することもできるが、その一方で、アタナシオスという名の別の修道士が作者であった可能性も残されている。二人のアタナシオスを同一人物とする議論は依然として決定的な根拠を欠き、推測ないし示唆に留まっているのである。こうした十分な証拠を欠く袋小路的な状況にあって、一体どのような論証の突破口を見出すことができるのだろうか。以下の議論では、ガレシオンの修道士アタナシオスと総主教アタナシオスが同一人物であることを示す新たな証拠を、写本に即して発見・提示することが試みられる。

① 古代以来のギリシア語による文字文化が存続した上、七、八世紀頃に筆記により適した小文字体（ミナスキュール）が創出されたビザンツでは、確実に、その歴史を通じて膨大な量の写本が生産された。小文字体については、R. Devreesse, *Introduction à l'étude des manuscrits grecs* (Paris, 1954), 30-35を参照。ビザンツに由来するギリシア語写本を最も多く所蔵するのは、ヴァティカン教皇庁図書館（Biblioteca Apostolica Vaticana）であろう。たとえば、ヴァティカン・ギリシ

ア語写本（Codices vaticani graeci）の総数は一二六〇〇余に及ぶ。なお現在までに刊行された九冊の写本カタログによって、およそ三分の二のコーデックスがカバーされている。

② コンスタンティノープル総主教アタナシオスについての代表的な研究は、A.-M. M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius (1289-93; 1303-09) and the Church', *Dumbarton Oaks Papers* 27 (1973), 7-33; J. L. Boojamra, *Church Reform in the Late Byzantine Empire: A study for the Patriarchate of Athanasios of Constantinople* (Thessaloniki, 1982); idem, *The Church and Social Reform: The policies of the Patriarch Athanasios of Constantinople* (New York, 1993)など。筆者の課程博士学位請求論文『コンスタンティノープル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機』（京都大学、二〇〇六年度提出）もあわせて参照されたい。なお、本稿は同論文の補論一「アタナシオスの直筆写本は現存するか？」の一部に手を加えたものである。

③ 代表的な史料に二篇の聖人伝とアタナシオス自身の書簡とがある。Theoktistos the Stoudite, A. Papadopoulos-Kerameus ed., *Vita Athanasii, Zapiski-istoriko-filologiceskago fakul'teta Imperatorskaga S.-Peterburgskago Universiteta* 76 (1905), 1-5（以下、*Theoctisti Vita Ath.* と略記）; Joseph Kalothetos, *Vita Athanasii,* in: D.G. Tsames ed., *Ἰωσὴφ Καλοθέτου Συγγράματα* (Thessaloniki, 1988), 453-502. アタナシオスの書簡は現在、一三〇通ほどが校訂されている。A.-M. M. Talbot, *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople: Letters to the Emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials* (Washington, D.C., 1975); E. Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (1289-1293; 1303-1309): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil.Thesis, University of Oxford, 2004). パテダキスはアレクサンドリア総主教座の図書館において新たなアタナシオス書簡を発見し、写本伝来（manuscript tradition）についての新見解を提示している。*Ibid.,* 143-55.

④ ビザンツにおける識字は同時代の西欧よりも一般的に高かったと考えられている。Cf. R. Browning, 'Literacy in the Byzantine world', *Byzantine and Modern Greek Studies* 4 (1978), 39-54; M. Mullett, 'Writing in early medieval Byzantium', in: R. McKitterick ed., *The Uses of Literacy in Early Mediaeval Europe* (Cambridge, 1989), 156-85; J. Waring, 'Monastic reading in the eleventh and twelfth centuries: divine ascent or Byzantine fall?', in: M. Mullett and A. Kirby ed., *Work and Worship at the Theotokos Evergetis, 1050-1200* (Belfast, 1997), 400-19; eadem, 'Literacies of lists: reading Byzantine monastic inventories', in: C. Holmes and J. Waring, *Literacy, Education and Manuscript Transmission in Byzantium and Beyond* (Leiden, 2002), 165-86.

⑤ ビザンツにおける古典文献学および知識人による写本生産については、N. G. *Wilson, Scholars of Byzantium* (London, 1996, rev. ed.)に詳しい。ビザンツの著名な人物の直筆写本が今日まで残っていることは自体は稀有なことではない。初期パライオロゴス朝の知識人では、たとえば、キプロスのグレゴリオス、マクシモス・プラヌーデス、テオドロス・メトキテスらの直筆写本が現存している。

⑥ 文献学者たちは書物文化の探求という道を通じて、社会・文化史的領野に接近しているとも言えよう。H. Hunger, *Schreiben und Lesen in Byzanz: die byzantinische Buchkultur* (Munich, 1989) や C. Mango et al. ed., *Byzantine Books and Bookmen* (Washington, D.C., 1975)などが代表的な研究。緻密な文献学的分析をもとに、特定の写本成立の歴史的コンテクストについて優れた議論を行っているのは、A. Alexakis,

Codex Parisinus Graecus 1115 and its Archetype (Washington, D.C., 1996)。欧米のビザンツ研究の世界において文献学と古文書学の歴史は古く、重要な業績も多い。これは古代ギリシア・ヘレニズム期の文学作品の多くが、ビザンツを経由して西欧に伝来したためである。本稿でも言及されるベルナール・ド・モンフォーコン（一六五五―一七四一年）などがその草分け的存在である。古代のギリシア・ラテン語写本の伝来については、L. D. Reynolds and N. G. Wilson, *Scribes and Scholars* (Oxford, 1991, 3rd ed.)（西村賀子・吉村純夫訳『古典の継承者たち』国文社、一九九六年）を参照。わが国の西洋史学界では、それを専門とする学者の不在もあって、文献学や古文書学は単なる歴史補助学として無視される傾向にあったが、最近、西ヨーロッパ史研究者の間で関心が高まりつつある。J・マビヨン（宮松浩憲訳）『ヨーロッパ中世古文書学』（九州大学出版会、二〇〇〇年）、國方啓司・直江眞一編『史料が語る中世ヨーロッパ』（刀水書房、二〇〇四年）、高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』（東京大学出版会、二〇〇五年）の刊行がその好例である。

第一章　先行研究の概観
――モンフォーコンからパテダキスまで

一部の研究者は、パリ写本の作者がガレシオン滞在時の総主教アタナシオスにほかならないと考えている。ガレシオンとは、小アジアのエフェソス北部に栄えた山岳修道院共同体、すなわち聖山である。[1] アタナシオスはコンスタンティノープル総主教に就任する以前、一八年間このガレシオンに滞在したと伝記作者が伝えているため、彼らはこの若きアタナシオスが当該写本の作者であると推測しているわけである。[2] 彼らの主張を検討する前に、この写本の特徴について概説しておこう。内容は、一一世紀半ばにコンスタンティノープル郊外にテオトコス・エウエルゲティス修道院を創建した修道士、パウロス・エウエルゲティノスが編纂した修道生活に関する名句集（フロリレギウム）、一般に『シュナゴゲ』あるいは『エウエルゲティノス』と呼ばれる作品[3]の第四巻である。彼らの注意を惹いたのは、この写本の奥付である。ここには百行におよぶ韻文とモノコンデュロス（一筆書きの語句を連ねた文章）とが作者によって残されている。

一八世紀初頭にこの写本に注目したモンフォーコンは、奥付末尾にあるモノコンデュロスを解読し、この奥付は「ゲネシオスの修道院においてアタナシオスの手で ἐν τῇ μονῇ Γενηϊσίου διὰ χειρὸς Ἀθανασίου」、第四インディクティオン、二月一七日水曜日に記されたものであると主張した。[4] 一九世紀末には、オモンがモンフォーコンの読みを修正している。すなわち彼は、モンフォーコンが「ゲネシオスのΓενηϊσίου」と読んだ語が正しくは「ガレシオンのΓαληϊσίου」と読まれるべきと主張したのである。[5] 二〇世紀半ばにこの写本を改めて検討したベルギーのボランディ

スト（聖人伝編集に従事するイエズス会士）、アルカンは、オモンによって提起された「ガレシオンの」の読みを支持した上で、奥付の作成年代を特定した。彼によれば、写本は筆跡の特徴から一三世紀に作成されたことが確実であり、一三世紀において、第四インディクティオンの二月一七日が水曜日であったのは一二六一年のみであるという。[6]

続いてイギリスの文献学者ウィルソンはアルカンの学説を支持すると同時に、より大胆な仮説を提示している。彼はこれまで注目されてきたモノコンデュロスではなく、その手前に置かれた韻文の記述に注意を喚起する。というのも、そこには写本作成の経緯が述べられているからである。まず冒頭部では、パウロス・エウエルゲティノスの著作の写本が、テオドリトス、マカリオス、アタナシオスの三名の修道士によって、「ガレシオンの修道院のために τῇ μονῇ Γαλησίου」作成されたことが明記されている。この事実から、ウィルソンは、写本の作成地がゲネシオスの修道院ではなく、ガレシオンであったことを確認する。次いで、韻文末尾の数行にヨセフの名が、「この修道院のムネストル、我が父にして賢明なる教師 τῆς μονῆς τοῦ μνήστορος ἐμοῦ πατρὸς καὶ σοφοῦ διδασκάλου」と言及されていることに注目する。ムネストル μνήστωρという名詞は一般には求愛者や婚約者を意味するが、彼は、一三世紀半ばにガレシオンの首長を経てコンスタンティノープル総主教に就任したヨセフ（在位一二六七-七五年、八三年）が大教会のシュナクサリオン（典礼文書）においてムネストルの語によって呼ばれていることを確認し、奥付に現れるヨセフが総主教ヨセフと同一人物である可能性はきわめて高いとしている。この指摘に続けて、彼は、後の総主教アタナシオスが一二六一年の時点でガレシオンに暮らしていたと考え、写字生のアタナシオスが総主教のアタナシオスと同一人物である可能性を示唆している。ただし、この最後の説についてはウィルソンも根拠が不十分であることを認めている。彼は、一四世紀の知識人ニケフォロス・グレゴラスの発した、アタナシオスが教養を欠いていたというコメント[7]を取り上げ、それが正当な評価であるとすれば、アタナシオス同一人物説は信憑性の乏しいものになるだろうと述べている。[8]

明確な言及があるわけではないが、ウィルソンがアタナシオス同一人物説を示唆に留めるのはほかにも理由がある。それは、一三世紀のガレシオンでは多くの写本が作成されており、複数のアタナシオスがそれに従事していた可能性があることである。アルカンの研究によれば、ガレシオンの修道士が作成した写本およびガレシオンの図書室に属していた写本は、確認しうる限り、約二

〇冊が現存するという。さらにガレシオンに属していたことが確実な写本一四冊のうち、四冊が一三世紀に特定できるという。[9] もちろん目安にしかならないわけではあるが、これを一二世紀が三冊、一四から一五世紀が一冊という事実とあわせて考えると、一三世紀のガレシオンにおいて写本作成が活発に行われていた可能性は高いであろう。また、この問題についてはウィルソン自身が検討を加えているが、一三世紀にはアタナシオスという名の写字生が複数確認されている。彼は、パリ写本以外のほかに、一三世紀にアタナシオスという名の修道士によって作成されたことが確認できる写本を三点挙げ、いずれの筆跡もパリ写本のそれとは異なることを示している。[10]

ウィルソンの研究はギリシア語写本に関係するいくつかの問題への覚書という体裁をとっているため、パリ写本のアタナシオスについて決定的な学説を提示するには至っていない。他方、ヨセフの同定についての彼の主張は、可能性があるというよりはむしろ確実であると言えよう。一二六一年の時点でガレシオンの首長[11]が後の総主教のヨセフであったことは確かであり、大教会のシュナクサリオンでヨセフがムネストルの名詞によっても呼ばれているのであれば、両者の同定に異論が入る余地はないだろう。

アルカンとウィルソンの研究から数年後には、ポーランド系の古文書学者トゥーリンがパリ写本とほぼ同一筆跡の写本が存在することを突き止めている。[12] 件の写本はヴァティカン・レギネンシスのギリシア語写本六三番、正確に言えば、この写本のわずか二フォリオである。一一月用典礼文を内容とするこの写本にも、パリ写本と同じく奥付があり、そこに作者、作成年などの情報が記載されている。奥付から得られる情報は以下のとおりである。作成地はガレシオン、作者は修道士バルラーム。作成年月はビザンツ歴六七六八年、第一三インディクティオン、すなわち西暦一二五九年九月から一二六〇年八月にかけて。そのほか、皇帝アンゲロス・コムネノス（ヨアネス四世ラスカリス）、ミカエル・パライオロゴス、ガレシオン首長ヨセフへの言及がある。

この奥付の記述のみを見れば、この写本が一二五九年から翌年にかけてのある時期にガレシオンの修道士バルラームによって作成されたと判断されるわけであるが、トゥーリンは写本全体を検討した結果、およそ一四〇あるフォリオのうち、第三一フォリオ表面から第三二フォリオ裏面までの筆跡がそれ以外の部分とは異なっていることを発見した。これに加えて彼は、この二フォリオ分の筆跡がパリ写本のそれとほぼ同一であることを確認したのである。実際に二つの写本の図版を比較すれば、それが同一人物の筆跡であることは歴然としており、トゥーリンの主張に疑問の余

地はないと思われる。[13] ただ残念ながら、パリ写本のアタナシオスの筆跡が他の写本中に確認できるとしても、この事実が明らかにする歴史的情報は限られている。つまりそれは、一二六一年の写本の作者アタナシオスが一二五九年もしくは一二六〇年にもガレシオンに滞在しており、修道士バルラームとともに写本作成に携わったことを示すに過ぎないのである。

こうして二つの写本に痕跡を残しているガレシオンの修道士かつ写字生のアタナシオスについて、ベルギーの学者ドゥクレルクは、後の総主教アタナシオスとの同一人物説をウィルソン以上に強く主張している。彼は、アタナシオスの直筆であることが確実にわかる写本が現存しない以上、比較の方法によってパリ写本の作者をアタナシオスに特定することが不可能であると認め、いくつかの間接証拠を提示することによって同一人物説の蓋然性を高めようとする。[14]

彼の説明は以下のように要約できるだろう。まず、一三世紀においてガレシオンに暮らしていたことが確認される修道士のうち、この写本以外でアタナシオスの名によって知られているのは総主教のアタナシオスのみである。次いで、伝記の記述を信用すれば、アタナシオスが一二六一年の時点でガレシオンに滞在していたことは確実である。そして、同じく伝記の記述が信頼できるとすれば、アタナシオスはガレシオン滞在時に多くの宗教文献を読書している。この事実は、彼を無学と評したグレゴラスの記述を退けるとともに、彼に写本作成のための識字能力が十分に備わっていたことを示唆する。四つ目は、アタナシオスとヨセフとの密接な関係である。パリ写本の奥付は、ヨセフとアタナシオスの間に密接な師弟関係があったことを示唆する。一方、総主教のアタナシオスもその書簡の中でヨセフに対し好意的な記述を残している。[15] 最後は、写字生アタナシオスが優秀な修道士であったと考えられること。ドゥクレルクは、知的能力の面でも霊性の面でも周囲から認められた修道士のみが写本作成に従事できたと考え、当時のガレシオンにおいて、アタナシオスがそうした修道士の一人であっただろうとする。[16] つまり、この想定は、アタナシオスがガレシオンにおいて卓越した修道士になったという伝記の記述、および彼のその後の政治的上昇と上手く調和する。[17]

以上のようなドゥクレルクの説明は、果たして、アタナシオス同一人物説の蓋然性を高める有効な説明となっているのだろうか。筆者の考えでは、それは依然不十分である。彼の挙げる間接証拠を一つずつ検証してみよう。第一点目については、歴史的に見て、ビザンツの修道士の大多数は史料に名を留めることのない無名の存在であったという一般論的反論が可能であるし、アタナシオス

という名が修道士名として一般的であったことも考慮されねばならないだろう。仮に、ガレシオンの修道院共同体が数名の修道士からなるきわめて小規模なものであったとすれば、両アタナシオスが同一人物である可能性は高くなるであろうが、実際のところ、数十名以上の修道士人口を擁していたのではないかと推測される。[18]

二点目について、アタナシオスが一二六一年の時点でガレシオンに暮らしていたのは確かであろうが、注意しなければならないのは、彼が滞在八年目にアカキオスからアタナシオスへと改名したという伝記の報告である。[19] つまり、アタナシオスは一二六一年の時点ですでにアタナシオスの新名を名乗っていたかもしれないが、依然アカキオスの名のままであったかもしれないのである。実質、彼のガレシオン滞在の時期に関する我々の手がかりは二つしかない。一つは、彼がおよそ一八年間ガレシオンに滞在したであろうこと。もう一つは、合同反対派への弾圧がアトスに及んだ一二七六年頃まで、彼がアトスにいたことである。[20] ガレシオンからアトスへの移動が一二七一年までに行われたのであれば、一二六一年の時点で彼の名はアタナシオスであったことになるし、それが一二七一年以降であれば、旧名のアカキオスであったことになる。いずれにせよ、移動がいつ行われたのか明確でない以上、両アタナシオスの名前の一致は決定的な根拠とはならない。

三点目から五点目も重要な指摘であることに相違ないが、いずれも証拠としては不十分である。というのも、識字・写本作成能力、首長ヨセフとの緊密な関係、ガレシオン内部での高評価、これら要件すべてを満たす別のアタナシオスが存在した可能性は排除できないからである。

以上のドゥクレルクの研究からおよそ二〇年を隔てて、ギリシア出身の若手の文献学者パテダキスがオックスフォードに提出した博士論文においてパリ写本の問題を取り上げた。彼は総主教アタナシオスの学歴と教養レベルについて論じた箇所で、パリ写本の作者アタナシオスの問題に言及し、ドゥクレルクの所説に賛意を表している。[21] 彼はドゥクレルクの挙げた間接証拠のほかに、パリ写本奥付の言語と構文の特徴が総主教アタナシオスのそれと一致することを指摘し、「結果として、パリ・ギリシア語写本八五七番の作者と総主教アタナシオス一世を同一人物とみなす見解には十分に根拠がある」と述べている。[22] しかし私見では、言語および構文の特徴の一致が同一人物説の十分な根拠となりうるのか、という疑義が残る。

パリ写本奥付の言語・構文の主な特徴は、ドゥクレルクによれば以下のとおりである。まず、二つの単語を組み合わせて作った副詞や名詞が散見されること。次いで、ἄν を使わず、εἰ のみで接

続法の節が導かれていること。そして、アオリスト接続法が未来直接法に代用されていること。実際、これらの特徴は、パテダキスが総主教アタナシオスの書簡の仔細な分析から導いた諸特徴の中に含まれている。[23]

この事実は、アタナシオスの同一人物説をより確実にするかの印象を与えるが、問題は、その共通する特徴が必ずしもアタナシオスに限定されなかったことである。当時の辞書にも見られない特殊な造語の使用が、パリ写本とアタナシオス書簡の双方に確認できることは興味深い点ではあるが、彼以外の修道士や文人たちがそうしなかったとは想定しがたい。[24] また、ドゥクレルクの指摘する文法についての二点は、彼自身やその他の学者も指摘しているように、中世ギリシア語の一般的特徴である。[25] 結局、パテダキスの挙げる第六の根拠も、両アタナシオスが別人物であった可能性を排除することはできないのである。しかし、これら一致の意味することは決して過小評価できない。というのも、それは改めて、二人のアタナシオスが似たような学歴・文化的傾向の持ち主であったことを示すからである。とりわけ文法に関する特徴の一致は、二人とも、徹底して擬古文（アッティカ方言）にこだわった知識人層とは生活・文化的背景を異にする著述家であったことを示している。

① ガレシオンの歴史と地誌については、R. Janin, *Les églises et les monastères des grands centres byzantins* (Paris, 1975), 241-50、共同体の創始者ラザロスについては、R. P. H. Greenfield, *The Life of Lazaros of Mt. Galesion: An eleventh-century pillar saint* (Washington, D.C., 2000)を参照。

② *Theoctisti Vita Ath*, 9-10.

③ 作者パウロスおよび作品については第二章の注②を参照。

④ B. de Montfaucon, *Palaeographia Graeca* (Paris, 1708), 65, 349. モンフォーコンによる読みはガルトハウゼンによって踏襲されている。V. Gardthausen, *Griechische Paläographie*, v. 2 (Leipzig, 1913, 2nd ed.), 51.

⑤ H. Omont, *Fac-similés des manuscrits grecs datés de la Bibliothèque Nationale du IXe au XIVe siècle* (Paris, 1891), 12.

⑥ F. Halkin, 'Manuscrits galésiotes', *Scriptorium* 15 (1961), 221-27, 223.

⑦ Nikephoros Gregoras, *Byzantina Historia*, ed. L. Schopen (Bonn, 1829-30), 100.

⑧ N. G. Wilson, 'Notes on Greek manuscripts', *Scriptorium* 15 (1961), 316-20, 318-19.

⑨ Halkin, op.cit., 221-25.

⑩ Wilson, op.cit., 317-20.

⑪ ガレシオンは単一の修道院ではなく、複数の修道院から構成される共同体であったため（少なくとも創設から間もない時期に関して）、その長は修道院長を表す一般的な語ἡγούμενοςではなく、προεστάτης（首長）で呼ばれることが多かった。

⑫ A. Turyn, *Codices vaticani graeci saeculis XIII et XIV scripti annorumque notis instructi* (Vatican, 1964), 44-46 with tables 19 and 20.

⑬ パリ写本の図版（図一）は、E. Gamillscheg and D. Harlfinger, *Repertorium der griechischen Kopisten, 800-1600*, v. 2, C (Vienna, 1989), table 5 (f. 5v)を参照。レギネンシス写本の図版（図二）は、Turyn, *Codices vaticani graeci*, table 20 (f. 32r)を参照。

⑭ J. Declerck, 'Un colophon métrique d'Athanase le Galésiote (13e s.)', *Revue des Etudes Byzantines* 43 (1985), 197-208.

⑮ Talbot, *The Correspondence*, no. 115, ll. 131-34.

⑯ ドゥクレルクのこの見解は、当時のビザンツでは、羊皮紙が高価で入手しにくかったという事実によっても支持されるであろう。紙の使用は一三世紀頃より徐々に普及していくが、一三世紀の段階では羊皮紙の使用が一般的であった。J. Glénisson et al. ed., *La Paléographie grecque et byzantine* (Paris, 1977), 27-60; A. Kazhdan et al. ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium* (New York, 1991)（以下、*ODB*と略記）, s.v. 'parchment' and 'paper'.

⑰ 奥付の記述によれば、エウエルゲティノスの写本の転写は三名の修道士によって行われた。計四部からなる作品の前半二部は「修道生活において卓越した人ἀνδρὸς μονήρει διαπρέψαντος βίῳ」テオドリトスが「以前にπρὶν」単独で転写した。後半の二部については、「優れた修道士τοῦ μοναστῶν ἐκκρίτου」マカリオスが材料となる羊皮紙を用意し、「修道士τοῦ μοναχοῦ」アタナシオスが転写を担当した。現存しているのはアタナシオスが転写した二部のうちの後半、第四部のみである。前半二部の転写を担当した修道士テオドリトスは、アタナシオスによる修飾文がアオリスト形になっていることから、アタナシオスが奥付を記入した時点で他界していた可能性もある。Declerck, op.cit., p. 208, n. 42.

⑱ 聖ラザロスによるガレシオン共同体の創建および修道士人口については、Janin, *op.cit.*, 247-49を参照。

⑲ *Ibid.*, 10. アカキオスはアタナシオスがテッサロニケの修道院で修練士となったときに授けられた最初の修道士名で、出世時の名はアレクシオスであった。

⑳ アトス山に対する取り締まりについては、V. Laurent and J. Darrouzès, *Dossier grec de l'Union de Lyon (1273-1277)* (Paris, 1977), 82-88および筆者の *Byzantine Monks and the Union of Lyons* (M.Phil. Thesis, University of Birmingham, 2004), 55-66を参照。

㉑ Patedakis, *op.cit.*, 90.

㉒ *Ibid.*, 91.

㉓ *Ibid.*, 17-70, esp. 39-50.

㉔ *Ibid.*, 30-38. シェフチェンコは、一三世紀のキプロスの隠者ネオフュトスがその著述の中で造語的な副詞を多用していることを指摘している。シェフチェンコは、副詞に限定されない造語の広範な使用を、高等教育を受けていない著述家たちの「中間様式」の特徴として位置づけている。I. Ševčenko, 'Levels of style in Byzantine prose', *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik* 31 (1981), 289-312.

㉕ G. Horrocks, *Greek: A History of the Language and its Speakers* (London, 1977), 177, 195.

第二章　さらなる証拠の提示——テクストと筆跡

こうして複数の研究者がガレシオンの修道士アタナシオスの問題をめぐって議論を重ねてきたわけであるが、私見では、ガレシオンのアタナシオスと後の総主教アタナシオスを結ぶさらなる証拠を提示することが可能である。

一つの鍵となるのは、パウロス・エウエルゲティノスのテクストである。すでに触れたように、ガレシオンの修道士アタナシオスが他の二人の修道士とともに新たな写本の作成に着手したのは『シュナゴゲ』である。この著作は、修道生活に関連するギリシア教父や古代の隠者たちの膨大な量の言葉が二百の題目（ヒュポテシス）にそって編集、配置されたフロリレギウム、つまりマニュアル的なアンソロジー[①]であり、テオトコス・エウエルゲティス修道院に暮らす修道士のために、パウロス自身の手で作成されたものである[②]。

奥付の詩において、この書物を読むことが持つ霊的効果を将来の読み手に対して力説していることからも示されるように、ガレシオンのアタナシオスが写本を作成するに当たって、長大な『シュナゴゲ』を丹念に読書したことは間違いない。この書物の読書の痕跡が総主教アタナシオスの中にも見出せれば、それは両者が同一人物であることを示唆する新たな証拠ということになろう。

総主教アタナシオスの著述の検討に入る前に、『シュナゴゲ』というテクストの普及度を確認しておこう。最初の印刷本は一七八三年、コリントス主教マカリオスとアトスの修道士ニコディモスによってヴェネツィアで出版された。その後はイスタンブール、次いでアテネを出版地として、何度か版を重ねている[③]。批判校定本はいまだ現れておらず、文献学研究も十分進展していないため、テクストの成立経緯と流布の過程を正確に把握することはできないが、M・リシャールらが明らかにした収録写本と作成年代についての情報から、少なくとも、写本が一三世紀以降、とりわけ一四世紀に多く作成されたという事実が確認できる[④]。しかしながら現存する写本はおよそ七〇冊しかなく、しかも一写本に四部すべてが収録されているケースは少ないため、テクストが一三世紀以降好んで転写されたのは事実であるとしても、その人気は一部修道士の世界に限られたものであったと考えられる。

それでは、総主教アタナシオスの著述や行動の中に『シュナゴゲ』の読書の痕跡を見出すことは可能か。筆者はこの問いに対して、少なくとも三つの痕跡が実際にあると考える。

一つは、総主教アタナシオスが二度目の在位期に作成した修道院規則、ヒュポテュポシスである。一般にはテュピコンと称されるビザンツの修道院規則は、修道院の創建者の手によって、各施設の必要ないし理想に応じて自由に作成されていたが、アタナシオスのヒュポテュポシスは特定の修道院ではなく、帝国内にある全修道院を対象にした、きわめて特異なテュピコンであったと一部研究者から推測されている[⑤]。ここでの議論に関連して重要であるのは、アタナシオスのヒュポテュポシスがそれまでのテュピコ

ンの伝統から逸脱するいくつかの要素を含みながらも、基本的にはエウエルゲティス修道院の伝統、すなわち同修道院の創始者パウロスの死後、修道院長の地位を継承した直弟子ティモテオスが作成したヒュポテュポシスに根差しているという、テクストの編者T・ミラーとJ・トーマスの指摘である。

アタナシオスとティモテオスのヒュポテュポシスの具体的類似点は、平等主義的な共住生活への志向、俗世の放棄と上長への服従の要求、備品窃盗の厳禁、交友関係の制限、いわゆるテーブルマナー、上長と数名の有徳な修道士による施設の協力的運営、ヒュポテュポシスの毎月の朗読の規定など、多岐にわたっている。ティモテオスのヒュポテュポシスの編者や訳者らは言明していないものの、ティモテオスが彼の師パウロスの『シュナゴゲ』を主要史料として参照しながら、ヒュポテュポシスを作成したことは明らかである。[6] つまり、著者と作成年代、そしてテクストの長さの相違にかかわらず、パウロスの『シュナゴゲ』とティモテオスのヒュポテュポシスは修道生活に関する理想の共通性を特徴としているのである。ここから判断できるのは、仮に二人のアタナシオスが同一人物であったとすれば、総主教アタナシオスのヒュポテュポシスに『シュナゴゲ』的な要素が色濃く現れうることである。[7]

二つ目の痕跡は、司祭職（ヒエロシュネ）の重要性に対する、総主教アタナシオスの態度と自覚である。まず指摘できるのは、彼がその生涯において司祭職を拒絶しなかったことである。総主教アタナシオスはガレシオン滞在時、助祭職と司祭職を授与され、修道院内で典礼を執行する権利を持つ修道司祭となった。伝記作者テオクティストスは、アタナシオスが名誉への野心からではなく、周囲からの強い要請に応じてその地位を受けたと強調している。[8] 一二八九年の彼のコンスタンティノープル総主教就任についても、同時代の歴史家パキュメレスは、アタナシオスが皇帝と教会会議からの要請に不承不承応じたことを報告している。[9] アタナシオスに対して対照的な評価を下す二人の人物が、司祭職への就任に関しては同様の証言を行っていることから、アタナシオスがその修道士としての生活において司祭職を積極的に求めなかったことはおそらく事実だろう。彼には司祭職への就任を拒絶して、従来的な修道生活を継続する道もあったが、彼はそれを選択しなかった。彼にとって、司祭職とは周囲や上長からの強い要請があれば、不承不承であれ引き受けるべきものだったのである。

総主教となったアタナシオスが司祭職にあるその他の人々に規範の厳格な遵守を求めたこともよく知られている。彼はとりわけ教区民の司牧を務めとする主教に、彼ら本来の宗教的責務を果た

すよう迫った。アタナシオスが総主教位にあった時代、主教が様々な理由で自らの教区を長期にわたって離脱し、首都に滞在することは一般的となっていたが、彼はそうした主教は職務を放棄していると非難し、彼らに対し、教区へ帰還し、「キリストのよき羊飼い」として人々を正しく指導するよう求めた。こうしたアタナシオスの努力はそれまでの総主教の政治とは明らかに一線を画すもの、すなわちビザンツ教会の改革運動にほかならなかった。[10]

一方、きわめて興味深いことに、『シュナゴゲ』においても司祭職は大きな扱いを受けている。この作品は一般の学習教材のように、基礎的な事項からより複雑で高度な事項へと、修道士の歩みに即した構成になっている。司祭職が一連の項目として登場するのは第四部、それもその後半部である。明らかにパウロスは、修道士の生活にとって司祭職がきわめて重要であると考え、それを著作全体の最後に配置しているのである。パウロスの意図は項目の表題から読むことができる。修道士は司祭職を積極的に欲するべきではなく、要請された場合は、それを神の要請として受け入れるべきである。統治と教育のため、敬意をもって典礼を執行すべきである。真正なる牧者あるいは教育者としての務めを果たさなければならず、信者をその敵から守らなければならない、等々。[11] パウロスの理想と総主教アタナシオスの理想が共通していることは一目瞭然であろう。

最後は、ビザンツ末期に興隆した修道霊性ヘシカスムにおける総主教アタナシオスの両義的な位置である。ヘシカスムは修道士が呼吸の調整によって心の完全なる静寂を実現させた状態で、イエスの祈りを連続して唱え、最終的には神との合一（正確には神の造られざるエネルゲイアへの参与）を果たすことを理想とする、神秘主義性格の強い霊性である。一四世紀半ば、神学的見地からヘシカスムを擁護したグレゴリオス・パラマスは、その著作『聖なるヘシカストの擁護』において、総主教アタナシオスをヘシカスムの興隆を用意した偉大なる教師の一人に数えている。[12]

これに関して歴史家たちを悩ませているのは、パラマスの明確な言及にもかかわらず、総主教アタナシオスとヘシカスムの接点がその他の同時代史料にほとんど確認できないという問題である。アトスの隠者ニケフォロスやフィラデルフィア府主教テオレプトスが著したような霊的作品を彼は残していないし、彼が、特定の祈りの実践によって到来する忘我の境地を、修道士の必要な経験として重視したことを示す証拠も存在しない。だが、総主教アタナシオスがガレシオンで『シュナゴゲ』を書写し、その著作から大きな影響を受けていたとすると、ヘシカスムの系譜における彼の位置を整合的に理解することが可能になる。というのも、K・

ウェアの研究によれば、『シュナゴゲ』もヘシカスムに関しては両義的なテクストだからである。[13]

『シュナゴゲ』において祈りの方法および意味は第三部と第四部前半の主題となっている。ウェアはそうした箇所での祈りの扱いが、一四世紀に流行したヘシカスムのそれとは幾分異なることを指摘している。呼吸や姿勢などの身体的側面への配慮は『シュナゴゲ』には見られない。また、忘我（エクスタシス）などの神秘現象への言及はあるものの、それらは必ずしも推奨されてはいない。他方でウェアが注目するのは、一四世紀的ヘシカスムを特徴づける要素である、イエスの祈りの実践や神的な光の体験への言及が、主にフォティケのディアドコスの引用を通じて、『シュナゴゲ』の中に確認できることである。つまり、強調点の明白な相違にもかかわらず、一一世紀に成立したこの作品は、作者パウロスの独自の資料選択によって、後のヘシカスムとの間接的リンクを有しているのである。なるほど総主教アタナシオスは祈りの実践による個人的な神秘体験については何も書き残さなかったが、彼が『シュナゴゲ』から大きな影響を受けていたとすれば、日常生活の中で、司祭職を授与される前の段階の修道士に対し、ディアドコス的な（身体技法をともなわない）イエスの祈りの実践を勧めていた可能性は十分ある。この場合、アトスのニケフォロスやその弟子テオレプトスらとの実践面での相違はあれど、パラマスの目には、総主教アタナシオスが一四世紀的ヘシカスムの先駆者の一人として映じたであろう。[14]

ところで修道士アタナシオスのパリ写本については、筆記スタイルの観点から一つの興味深い点を指摘することができる。それは、パリ写本を作成した人物のそれがある特定の地域的な伝統に根ざしていた可能性、より正確に言えば、その人物が一三世紀後半のガレシオンで写本作成に従事していた修道士たちの特定の筆記スタイルを共有していた可能性である。このガレシオン的な筆記スタイルの存在を最初に示唆したのはトゥーリンである。[15]彼が根拠とするのは以下三種の異なる写本に見られる類似性である。一つは、修道士ガラクティオンによって一二七八／九年（ビザンツ暦六七八七年）に作成された、作成地不詳の写本（オックスフォード・ロー写本七番）。[16]二つ目は、一二八四／五年（六七九三年）にガレシオンにおいて、盲目の修道士ガラクティオンの命を受けて作成された、作者名不詳の写本（オックスフォード・ロー写本一三番）の一部。[17]そして最後は、一二八〇年代と九〇年代の作品がいくつか現存するマヌエル・スフェネアスの写本である。[18]

トゥーリンは、ロー写本七番の作者ガラクティオンと、ロー写本一三番の作成を命じた盲者ガラクティオンとを同一人物と推測

する。彼がその根拠とするのは、両写本（一三番についてはその後半部分）の筆記スタイルの類似性である。彼はこの推測にもとづいて、一三世紀後半のガレシオンにおいて独特の筆記スタイルが使用・涵養され、それが活動地不明の写字生スフェネアスに影響を及ぼしたと推測を重ねているわけである。

トゥーリンは触れていないが、ガレシオン・スタイルなるものの存在をより強く示唆するのは、ガラクティオン作のロー写本と修道士アタナシオスのパリ-レギネンシス写本の類似であろう。両者を比較したときに、目立つ相違は行間および字間の幅であって、楷書的（neat）であるというよりは明確に草書的（cursive）な筆記と大型アルファベットの多用という点で、きわめて強い共通性があるのは明らかである。アタナシオスの写本の方が字間と行間に余裕のある分、二つの特徴がより鮮明に現れているとも言えよう。[19]

アタナシオスのレギネンシス写本が一二五九／六〇年、パリ写本が一二六一年、ガラクティオン作のロー写本が一二七八／七九年、そしてガレシオンの三名の修道士によるロー写本が一二八四／八五年。[20] このようにおよそ二五年の間に、微妙な差異・ヴァリエーションを包含しつつも、筆記スタイルの特徴を共有する複数の写本（とりわけアタナシオスの二写本とガラクティオンのロー写本）が確認されるのは注目に値するだろう。[21] 仮にトゥーリンの示唆するように、一三世紀後半のガレシオンにおいて、独自の筆記スタイルが成立、発展した可能性があるとすれば、関連して提起される問いは、いつ、なぜ、何が端緒となって、新たな筆記スタイルがガレシオンにおいて成立しえたのか、というものである。残念ながら参照可能な写本が限定的であるため、これに対する決定的解答を導くことは不可能である。

ともかくもここで、修道士アタナシオスの写本と、おそらくはガレシオンの修道士であったガラクティオンのロー写本に見られる筆記スタイルの強い類似が想起させる、総主教アタナシオスの伝記的エピソードに言及しておこう。総主教アタナシオスが若かりし頃、ガレシオンに一八年間滞在したと伝記作者テオクティストスが伝えていることはすでに指摘したが、件のエピソードとはこれに続く部分である。ガレシオンを後にして、アトス山で隠者的生活を始めたアタナシオスは、教会合同反対派への弾圧がアトスにも及んだ際に、そこを脱出し、ガレシオンに帰還している。彼はまもなくヨーロッパ側の聖山ガノスに向かったとされているので、再度のガレシオン滞在は短期間であったと考えられるが、テオクティストスは、アタナシオスが合同反対派の修道士ガラクティオン（後に処罰によって盲者となる人物）およびイサク・ガ

ラレスと交友を持ったことを報告している。[22] 後に総主教となるアタナシオスとガラクティオンの関係は最初のガレシオン滞在に由来するのか、それとも二度目の滞在で初めて成立したものなのかは不明であるが、写本における筆記スタイルと同様、両人物の間に密接な関係があったと伝えられていることは、パリ写本のアタナシオスと総主教のアタナシオスを直接線で結ばずとも、きわめて興味深い事実であると言えよう。

① フロリレギウムとアンソロジーの相違は抜粋される文章の性質にある。基本的に前者は神学的・霊的文章を、後者は世俗的な韻文を集成したものである。

② 『シュナゴゲ』に関しては、M. Viller et al. ed., *Dictionnaire de Spiritualité* (Paris, 1937-95)（以下、*DS* と略）, vol. 5, s.v. 'l'Evergétinon' (M. Richard), cols. 502-3, and vol. 12, s.v. 'Paul Evergétinos (de l'Evergétis)' (A. Solignac), cols. 562-4; H.-G. Beck, *Kirche und theologische Literatur im byzantinischen Reich* (Munich, 1959), 587; G. Collins, 'A neglected manual of the spiritual life', *Sobornost* 12 (1990), 47-51; M. Mullett and A. Kirby eds., *The Theotokos Evergetis and Eleventh-Century Monasticism* (Belfast, 1994) 収録の諸論文、とくに J. Wortley, 'The genre and sources of the *Synagogē*', 306-24を参照。

③ 最新の版は、一九八三年から八五年にかけてアテネで刊行された第六版である。

④ B・クロスティーニによれば、現在までに確認されている計六八冊の『シュナゴゲ』の写本のうち、一一世紀に由来するものは四冊、一二世紀のものは二冊を数えるのみである。B. Crostini, 'Towards a study of the scriptorium of the monastery of the Theotokos Evergetis: preliminary remarks', in: Mullett and Kirby eds., *op.cit.*, 176-97. これに対して一三世紀のものは約一〇冊、一四世紀については約一〇冊の写本が現存している。Cf. *DS*, s.v. 'l'Evergétinon', col. 503.

⑤ T. S. Miller and J. Thomas, 'The monastic rule of Patriarch Athanasios I: an edition, translation and commentary', *Orientalia Christiana Periodica* 62 (1996), 353-71, esp. 365-6; J. Thomas and A. C. Hero eds., *Byzantine Monastic Foundation Documents* (Washington, D.C., 2000), vol. 4, '*Athanasios I: Rule* of Patriarch Athanasios I (trans. Timothy Miller)', 1495-1504, esp. 1495-6. Cf. V. Laurent, *Les regestes des actes du Patriarcat de Constantinople*, vol. 1, fsc. 4 : *Les regestes de 1208 à 1309* (Paris, 1971), no. 1595 ; Boojamra, *Church Reform*, 172-9, esp. 179.

⑥ ティモテオスのヒュポテュポシスについては、P. Gautier, 'Le typikon de la Théotokos Evergétis', *Revue des Etudes Byzantines* 40 (1982), 5-101; Thomas and Hero eds., *op.cit.*, vol. 2, '*Evergetis: Typikon* of Timothy for the monastery of the Mother of God *Evergetis* (trans. Robert Jordan)', 454-506. 『シュナゴゲ』とヒュポテュポシスの共通性については、K. Ware, 'Prayer and sacraments in the *Synagogē*', in: Mullett and Kirby eds., *op.cit.*, 306-24, esp. 334-45.

⑦ もちろん、総主教アタナシオスが『シュナゴゲ』ではなく、ティモテオスのヒュポテュポシスを読書し、後者のテクストにもとづいて自身のヒュポテュポシスを作成した可能性も残されている。しかし、ティモテオスのテクストはわずか一点の写本でしか現存していないこと、一二世紀に作成された一部のテュピコンと異なり、アタナシオスのヒュポテュポシスの中にティモテオスのそれと重複する文章が一切存在

しないこと、アタナシオスとエウエルゲティス修道院の接点が報告されていないことなどから、その可能性は相対的に低いと判断できる。

⑧ *Theoctisti Vita Ath.*, 10.

⑨ Georgios Pachymeres, *Relations Historiques*, ed. A. Failler, vol. 3 (Paris, 1999), viii, 13.

⑩ 司祭職に対するアタナシオスの思想および彼と主教団の関係については、筆者の『博士論文』の第一部「アタナシオスの教会改革」を参照。

⑪ Cf. *DS*, s.v. 'Paul Evergétinos (de l'Evergétis)', cols. 563-4.

⑫ Gregorios Palamas, *Défense des saints hésychastes*, ed. J. Meyendorff (Louvain, 1959), vol. 1, I, 2, 12 and II, 2, 3.

⑬ K. Ware, op.cit., 345-7.

⑭ メイエンドルフはパラマスが晩年の総主教アタナシオスに師事した可能性を指摘している。パラマスは一二九六／七年にコンスタンティノープルで生まれ、一三一六年にアトスへと旅立っている。父親が皇帝アンドロニコスに仕える高官であった関係で、彼は幼少のころから宮廷に出入りしていた(若きパラマスにアリストテレス哲学を教授したのはテオドロス・メトキテスであったとされる)。したがって、たとえその弟子ではなかったとしても、少なくともアタナシオスとの面識はあっただろう。Cf. J. Meyendorff, *Introduction à l'étude de Gregoire Palamas* (Paris, 1959), 45-50.

⑮ A. Turyn, *Dated Greek Manuscripts of the Thirteenth and Fourteenth Centuries in the Libraries of Great Britain* (Washington, D.C., 1980), 85.

⑯ 内容は一二世紀の著述家エウテュミオス・ジガベノスの詩篇注解。*Ibid*, 23-25 with table 12 (f. 26r).

⑰ 内容は、エルサレムのヘシュキオスの詩篇第三注解と、ヨアネス・クリュソストモスの詩篇注解。*Ibid*, 33-38 with tables 22 (f. 30r), 23 (f. 103v), 24 (f. 126r). 写本作成を命じたガラクティオンは「盲目のτοῦ τυφλοῦ」と言及されていることから、教会合同への反対を理由に盲目刑に処されたことで知られる、ガレシオンの修道士ガラクティオンその人であると確証される。E. Trapp et al ed., *Prosopographisches Lexikon der Palaiologenzeit* (Vienna, 1976-96), no. 3473.

⑱ スフェネアスは作成した写本によってしか知られていない。A. Turyn, *Dated Greek Manuscripts of the Thirteenth and Fourteenth Centuries in the Libraries of Italy*, 2 vols. (Urbana, 1972), 55-57 with plate 42; M. Vogel and V. Gardthausen, *Die griechischen Schreiber des Mittelalters und der Renaissance* (Leipzig, 1909), 281.

⑲ おそらく類似点の中で、最も重要かつ顕著なものは、一部文字（とりわけアルファ）の終線が描くカーブであろう。一三世紀に作成された写本において、長い終線を持つ文字は少なからず確認できるが、その多くは直線的である。一方、アタナシオスとガラクティオンの写本において、延長された終線はおおむねカーブしている。

⑳ ロー写本一三番はトゥーリンによって、筆跡の相違から三名の修道士によって作成されたことが確認され、最後、ヨアネス・クリュソストモスの詩篇注解を書写した人物の筆記スタイルと、ガラクティオンおよびスフェネアスのそれとの類似が指摘されているわけである。Turyn, *Dated Greek Manuscripts of Great Britain*, 33-35. これに加えて、前半部の作者二名の筆記、および、それと後半部第三の作者の筆記の類似を指摘することも可能かもしれない。

㉑ ガレシオン的な筆記スタイルの存在を確証するためには、ガレシオン以外で作成された写本との比較も視野に入れた、さらなる考察が必要である。ここでの指摘は、トゥーリンと同様、筆記の細部にわたる検討にもとづくものではなく、筆記の一般的特徴の簡略な比較による

ものである。ちなみに、草書的で特定文字が丸みを帯びた筆記スタイルそのものは、一三世紀後半のビザンツの写本に多く確認される。Glénisson et al. ed., *op.cit.*, 263-67; *ODB*, s.v. 'minuscule'.

㉒ *Theoctisti Vita Ath.*, 12-13.

おわりに

パリ写本の作者であるガレシオンの修道士アタナシオスとは何者であるのか。確かにドゥクレルクが指摘したように、直接的かつ決定的な証拠によって彼が後のコンスタンティノープル総主教アタナシオスと同一人物であることを立証することは不可能であるかもしれず、二人のアタナシオスを結びつける間接的な証拠を積み上げることが当面は有効な方途であろう。かくして本稿ではドゥクレルクの指摘に沿う形で考察を進めたため、同一人物説の完全な立証を行うことはできなかったが、新たな間接的証拠が複数発見されたことはやはり重要である。①

総主教アタナシオスがある時点でパウロスの著作『シュナゴゲ』を読書し、それから大きな影響を受けていた可能性は高い。ガレシオンの修道士アタナシオスは『シュナゴゲ』の後半二部をすべて転写し、奥付においてその読書が持つ意義を説き、首長ヨセフへの従順と尊敬を記した。総主教アタナシオスは総主教ヨセフの権威を否定するアルセニオス派を激しく非難し、晩年に認めたある書簡の中では彼を証聖者と呼んでその生涯を称えた。ガレシオンの修道士アタナシオスは、一三世紀後半に同地で活動し数々の写本を残した修道士らと特定の筆記スタイルを共有していた。一方、伝記によれば、総主教アタナシオスはアトスで隠者的生活を開始するまでの一八年間をガレシオンで過ごし、その後、同地に一時的に帰還した際には教会合同反対派の修道士ガラクティオンらと親しくした。アタナシオスという修道士名が一般的であったことを考慮に入れても、このような両者の共通項の多さを単なる偶然として片づけることは困難である。

最後に総主教アタナシオスと、ガレシオンの修道士アタナシオスによって転写された『シュナゴゲ』との間にある、ビザンツの修道院文化に関する一つの共通性について指摘しておきたい。それは両者が修道士および修道生活にとっての霊的規範としての地位を、一三世紀を通じて高め、一四世紀に確立したことである。前者は、厳格な禁欲生活の実践と正教信仰の護持によってその権威を高め、二度、コンスタンティノープル総主教に就任し、死した後の一四世紀半ばに公式の聖人認定を受けた。後者は、現存する写本から判断すれば、一一世紀と一二世紀には格別人気のあるテクストではなかったが、一三世紀になると修道士の需要の高ま

りを反映するかのように多くの写本が作成され始め、一四世紀に最も多く作成された。両者がその人気と権威を確立するプロセスは、一見無関係のように見えて、実は古代的な宗教理念の復興という共通点を持っている（この問題については別稿で詳細に議論する予定である）。仮に、『シュナゴゲ』の後半二部を転写し、その霊的価値を奥付の韻文で謳いあげたガレシオンの修道士アタナシオスが、後の総主教アタナシオスであった場合、総主教と『シュナゴゲ』は相互に影響を与えながら、すなわち、アタナシオスはその古代的価値に重きを置いた修道生活と政治によって、『シュナゴゲ』はその価値を体現するアタナシオスの存在によって、それぞれの権威の上昇に貢献したと理解することができる。

パリ写本の作者アタナシオスの問題は、解答できるよりもはるかに多くの問題を提起するタイプの問題であるかもしれない。少なくとも本稿の結論として言えるのは、ガレシオンの修道士アタナシオスが総主教アタナシオスと同一の人物であった可能性がきわめて高いということである。この仮説の立証と同じく重要と思われるのは、『シュナゴゲ』の問題である。この書物はビザンツの修道院文化において具体的にいかなる役割を果たしたのか。一三世紀になると同時に多くの写本が作成されたのはなぜなのか。発展の時期を同じくするヘシカスムとの関係はあったのか。こうした問題の考察はアタナシオスのような特異な修道士聖人の考察と同様、ビザンツの修道院文化のいまだ知られざる一面に光を投じることになろう。

① 本文中では触れなかったが、私見では両アタナシオスの同一を立証する唯一の方法がある。それは本稿では部分的にしか用いなかったアプローチ、すなわち写本の筆跡比較である。比較対象となりうるのは、パリ写本と、総主教アタナシオス書簡集の最古にして最多の収録数を誇るヴァティカン・ギリシア語写本二二一九番（Codex Vaticanus Graecus 2219：以下、ヴァティカン写本と略）の一部である。タルボットは、筆跡の相違から三名の人物がヴァティカン写本の作成に関与したことを明らかにし、総主教アタナシオスの弟子であった三名の修道士がアタナシオスの死後に、彼の記憶を偲ぶために書簡を写本の形に取りまとめたと推測した。Talbot, *The Correspondence*, xxxvi パテダキスはこの仮説を部分的に修正し、次のように主張した。すなわち、ヴァティカン写本の後半部分の筆跡はパリ写本のそれと近似しており、総主教アタナシオスが生前にヴァティカン写本の作成に直接関与した可能性がある、と。Patedakis. *op. cit*, 133-39. パリ写本の作者を十分な根拠なく総主教アタナシオスと断定するなど、パテダキスの論証には明らかな不備があるのだが、パリ写本とヴァティカン写本の作成に同じ人物が関与していたことが筆跡の比較によって判明すれば、両写本の成立時期および間隔（五〇年から六〇年）から、総主教アタナシオスがその人物であったことが確実となる。ヴァティカン写本の成立をめぐる問題については、筆者の博士論文の補論一および補論二「声を救う――アタナシオス書簡集の起源について」を参照。

【付記】 本稿は平成一八年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別

研究員奨励費）による研究成果の一部である。
（日本学術振興会特別研究員）

Who was the Monk Athanasios of Mt. Galesion? : Some Remarks on the Copyist of One Thirteenth-Century Byzantine Manuscript (Codex Paris. Gr. 857)

by

HASHIKAWA Hiroyuki

The purpose of this paper is to identify the copyist of one thirteenth-century Byzantine manuscript, Codex Parisinus Graecus 857 (hereafter abbreviated as P). This manuscript, which contains the fourth part of Paul Evergetinos' monastic florilegium, known as *Synagoge* or *Evergetinon,* has neither illustrations nor descriptions of contemporary events and thus has remained virtually unknown to historians and art historians alike. It has, however, attracted the attention of some philologists and paleographers since the eighteenth century. The reason for this is the specific information provided by the copyist about himself in the colophon. He revealed therein that he was a monk named Athanasios, and moreover that he copied P in the monastery of Mt. Galesion in 1261. The two proper nouns and one specified date reminded some scholars of the Patriarch Athanasios I of Constantinople (1289-93, 1303-9), a radical, ascetic reformer of the late Byzantine church and society. This Patriarch Athanasios is generally considered to have lived between c.a. 1230 and 1320 and is reported by his two hagiographers to have stayed at Galesion for many years during his early life. From these pieces of evidence, they have assumed or asserted that the copyist Athanasios should be identified with Patriarch Athanasios. If their assumption is correct, it not only challenges the prevailing view that no holographic manuscript with the signature of Patriarch Athanasios survives, but also supports the hagiographical reports of his stay at Galesion. What is more, it enables us to estimate the influence of reading and copying Paul Evergetinos' *Synagoge* upon the later Patriarch Athanasios.

In this paper the scholarly debate on Athanasios, the copyist of P, is first surveyed. After careful examination of the points made by B. de Montfaucon, F. Halkin, N. Wilson, J. Declerck and E. Patedakis, it becomes clear that the theory of the identity of the two Athanasioi, supported by Declerck cautiously and Patedakis boldly, lacks crucial evidence and still remains a hypothesis. For instance, Declerck, whose study is undoubtedly the best and most detailed, raised five points which he considered as supportive evidence, but his argument does not necessari-

ly exclude the possibility that another Athanasios, not the later Patriarch, was engaged in copying P at Galesion.

Secondly, an additional four pieces of supportive evidence are proposed and discussed. Three of them are related to the P text itself, while the other is related to the script style. As for the former, there appear to be three traces of the *Synagoge* that are reflected in the life and thought of Patriarch Athanasios. One is the *Hypotyposis* (monastic rules or so-called monastic *typikon*) composed by Patriarch Athanasios in 1305 and applied to all the monasteries in the empire. It has been noted that his *Hypotyposis* has many similarities with the *Hypotyposis* made by the disciple Timothy for the monastery of Theotokos Evergetis founded by Paul Evergetinos, and Timothy certainly referred to Paul's *Synagoge* in writing his *Hypotyposis*. Second is the emphasis put by Patriarch Athanasios upon the significance of the priesthood for monks. At several stages of his life, Athanasios accepted priestly offices, though reluctantly, and became deacon, priest and patriarch. In the *Synagoge*, the final theses (the second half of part IV) were exclusively assigned to questions and answers about the significance of the priesthood for monks. Third is the ambivalent stance of Patriarch Athanasios in Byzantine hesychasm. Gregory Palamas mentioned this Athanasios as one of its forerunners, but otherwise there is no clear evidence for his involvement with hesychasm. By the same token, the *Synagoge* itself is an ambivalent text in terms of hesychasm. The fourth point concerning the script style is the possibility that P's copyist, Athanasios, was familiar with and influenced by a unique script style that had been developed at Galesion during the thirteenth century. This seems to agree with the hagiographical reports that Patriarch Athanasios stayed at Galesion for eighteen years.

Strictly speaking, there is no proving the theory of the identity of P's copyist, Athanasios, and Patriarch Athanasios as Declerck suggested, but it is important that in addition to the points made by Declerck four further points can be posed in its support and that no counter-evidence has been found thus far. It is almost certain that a young monk named Athanasios, who later became patriarch and a reformist, copied P during his long stay at Galesion.